

氏名（本籍）	高橋 司
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	博甲第 9923 号
学位授与年月	令和 3 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	教育・研究職の雇用形態がメンタルヘルスに及ぼす影響に関する研究
主査	筑波大学教授 薬学博士 熊谷 嘉人
副査	筑波大学教授 博士（医学） 本間 寛
副査	筑波大学講師 博士（医学） 井出 政行
副査	筑波大学助教 博士（心理学） 大谷 保和

論文の内容の要旨

高橋 司氏の博士学位論文は、若手研究者と若手教員において、雇用形態とメンタルヘルスの関連を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

研究背景

若手研究者や若手教員は、我が国の科学技術の発展を担う重要な人材である。近年、研究者や教員において非正規雇用の割合が増加している。非正規雇用はメンタルヘルスの悪化を招く可能性が指摘されている。しかしながら、研究者と教員における非正規雇用問題は、「比較的恵まれた高学歴エリートの問題」と捉えられる傾向にあり、雇用形態とメンタルヘルスの関係を検討した研究はこれまでほとんど行われていなかった。そこで著者は、若手研究者と若手教員において、雇用形態とメンタルヘルスの関連を明らかにすることを目的として行ったものである。

研究 1

目的

若手研究者における雇用形態とメンタルヘルスの関連を明らかにすることを目的としている。

対象と方法

著者は筑波研究学園都市交流協議会に所属している機関の労働者 19,481 名を対象に web アンケートを実施している。年齢、性別、学歴、雇用形態、収入、運動習慣、喫煙習慣、職業性ストレス、心理的苦痛を用いている。著者は職業性ストレスを評価するために、職業性ストレス簡易質問紙（Brief Scales for Job Stress, BSJS）を用い、20-39 歳の研究者を若手研究者と定義している。また、心理的苦痛を評価するために、著者は Kessler の心理的苦痛測定指標（K6）を用い、心理的苦痛を従属変数とするロジスティック回帰分析を行っている。

結果

有効回答者数は 7,251 名（有効回答率 37.2%）であり、そのうち職種が研究職である 2,762 名（正規雇

用 1,850 名、非正規雇用 912 名)を解析対象としている。そのうち 20-39 歳の若手研究者は、1,123 名(正規雇用 542 名、非正規雇用 581 名)であった。

著者は心理的苦痛を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った結果、20-39 歳の若手研究者において、非正規雇用と心理的苦痛の高さに有意な関連を認めている。一方、職業性ストレスの量的負荷において、正規雇用と非正規雇用で有意な差を認めていない。また、40-59 歳の研究者では、雇用形態と心理的苦痛に有意な関連を認めていない、と著者は報告している。

考察

20-39 歳の若手研究者では、著者は非正規雇用と心理的苦痛に有意な関連を認めている。その理由として、著者は若手非正規雇用研究者は雇用が不安定でありながら、研究成果が業績に大きく影響するため、大きな負担を感じている可能性があると考えている。

研究 2

目的

若手教員における雇用形態とメンタルヘルスの関連を明らかにすることを目的としている。

対象と方法

著者は小学校 400 校および中学校 400 校の合計 800 校に所属する、教員 19,638 名を対象に、アンケート調査を実施している。年齢、性別、雇用形態、教員経験年数、学校種職業性ストレス、心理的苦痛に関して調査している。教員経験 3 年目以下を若手教員と定義している。著者は職業性ストレスを評価するために BSJS を用い、心理的苦痛を評価するために K6 を用いている。また著者は、心理的苦痛を従属変数とするロジスティック回帰分析を行っている。

結果

有効な回答を得た教員は 11,330 名(有効回答率 57.7%、正規任用 9,877 名、非正規任用 1,453 名)であった。教員経験年数 3 年以下の若手教員は 1,820 名(正規任用 1,176 名、非正規任用 644 名)であった。著者は心理的苦痛を従属変数としたロジスティック回帰分析を行った結果、若手女性教員において、非正規任用と心理的苦痛の高さに有意な関連を認めている。若手女性教員において、著者は職業性ストレスの量的負荷、質的負荷および人間関係の困難は、正規任用に比べて非正規任用でいずれも有意に高かったことを明らかにしている。

考察

著者は若手女性教員では、職業性ストレスが相対的に低いにもかかわらず、心理的苦痛を感じている割合が多かったことを明らかにしている。若手非正規任用教員では、正規任用を希望しているにも関わらず、不本意に非正規任用となっていることが、著者は心理的苦痛の高さに関連している可能性があると考えている。

まとめ

最終的に著者は、若手非正規雇用研究者と若手非正規雇用女性教員では、心理的苦痛が高く、メンタルヘルスのリスクが高い可能性を示唆している。また著者は、心理的苦痛が高いことで、研究成果が低迷したり教員採用試験の受験が困難になることで、正規雇用に就きにくくなるという負の循環となる可能性も考えられ、重要な課題となることも示唆している。

審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、若手研究者(研究 1)と若手教員(研究 2)において、雇用形態とメンタルヘルスの関連を明らかにすることを目的とした横断研究である。その結果、上記したような新たな知見を得ており、博士論文にふさわしい成果を得たと言える。非正規雇用が心理的苦痛を高める可能性がある一方で、精神的不調があるために非正規雇用にならざるを得ないという逆の因果が存在する可能性を著者は考察しており、今後はその因果関係を証明するための研究も期待される。

令和 3 年 1 月 7 日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(医学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。